Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-06-24

エカテリーナ女帝とロシアの現実・文学（浜田泰佑教授定年退官記念特集）

村井，隆之

(Citation)
近代,56:149-167

(Issue Date)
1981-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81001360

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81001360

エカテリーナ女帝とロシアの現実・文学

村井隆之

ロシアにはリューリク招致説話というのがある。その昔、東方の遊牧民の騎馬隊の侵入に苦しむスラヴ人が、バイキングの首領リューリクを招聘して、王となって自分たちの国を守ってもらうという話である。その時、一族を率いてスラヴ人の国へやって来たのが、ロシアにおける最初の王朝リューリク朝の始祖である。

民族の移動・交流が活発なユーラシア大陸ならではの話である。ただしこの場合、招致される人物は、人間的魅力と能力に富んだ人でなければならない。それでなくては、折角の大役は勤まらないからである。おそらく彼は衆に抜きん出た知力、人並はずれて頑強な肉体、そして人間的魅力と威厳に満ちた人物であったにちがいない。

リューリクの場合とは事情を異にするが、女帝エカテリーナ二世[1]についても同様のことが言えるであろう。ドイツ生れで生粋のドイツ人であったエカテリーナが、ロシアへ来て、三十四年もの長きにわたってこの国を治め得たのは、彼女が並の器の女性ではなかったからであろう。

ソ連では専制君主に対する評価は一般的に言って低い。概して否定的である。専制政治との長い血みどろの戦いの末に、これを打倒して誕生した国としては当然である。しかし女帝エカテリーナの人間としての資質については例外的に比較的評価が高い。最新の大百科辞典においても、エカテリーナが「非凡な才能、意志の力、勤労意欲」[2]を

もつ人であったことが指摘されている。この種の文献にこの種の指摘が見られるということは、エカテリーナの人間像について考える場合、十分考慮に入れておいて良いことであろう。

現在のソ連においてすらこれであるから、女帝の生存中にはさぞ多くの崇拝者がいたことであろう。ここに『フェリーツァ』(3)（一七八二年）という頌詩がある。作者は当時のロシアの大詩人デルジャーヴィン(4)である。この長詩の大半の詩行は、啓蒙専制君主エカテリーナの人格がいかに高潔であるかの説明に費やされている。幸い除村ヤエ氏の名訳(5)があるので、それに基づきその部分を要訳してみよう。

日頃から食事は質素なものを召し上がり、身の安楽はこれを願わず、机に向かって読みかつ書き、ペンの力で万民にこよなき幸せをもたらされる。カルタ遊びや仮装舞踏会にうつつをぬかさず、自らドンキホーテを気どることはなく、謙虚な態度で仁徳を旨とし、常に有益に日々を送ろうと心がけておられる。他人の過ちに寛大で、馬鹿げたことは見て見ぬふりをし、曲がったことだけは我慢なさらない。決して居丈高に人を威圧せず、人間の値打ちを真っ直ぐに認め、功績のある者には名誉を与え、執務中も談笑の折もおおらかで、友とは愉快にかつ堅実に交際し、災厄に際して狼狽される様子はさらにない。しかも自分自身の栄光を誇らず、言論を弾圧せず、論敵に対して寛大である。民衆を衆愚とみなして侮らず、民衆の気風を高めることに心をくだいておられる。執務を離れてくつろぎの時には、物語や教訓を織り交ぜて子供のための本をお書きになる。圧政者・暴君になることを嫌い、慈愛をあまねく及ぼし、戦火をおさめ、貧しい者に衣食を与え、病めるものには安らぎと治療をほどこされる。また国民に外国へ行く自由を与え、産業を興し、科学を愛し、国民の福祉を念願されている。女帝のもとでは、正邪が見分けられ、年寄りが物乞いをして歩かず、勤め相応に日々の暮らしが成り立ち、良心が真実と一つになり、美徳が輝いている。

詩人が伝える女帝の人となりである。一点非の打ちどころのない君主像である。巷間に流布する女帝像とはよほど

趣きを異にする。映画などで描かれる、好色な美女、栄耀栄華をきわめ宮殿の奥で情夫と戯れ陰謀を逞しゅうする女帝の姿はどこにもない。

頌詩の作者の名誉のためあえて一言するなら、詩人は女帝におもねる目的でこれを書いたのでは断じてない。この詩は一見すると、全文これ賛仰といった観なきにしもあらずだが、実は全二十六章から成る詩行の相当部分が、宮廷貴族の弾劾に割かれている。詩人は、玉座の周囲に巣食う上流貴族の怠惰な生活、快楽主義、見栄、悪徳、頽廃に鋭い非難の矢を向けている。詩人はこの詩が公になると、必ず宮廷貴族の復讐あるを予期して、自発的にこれを発表する気は毛頭なかった。たまたま信頼する親友の一人に見せたことがあだとなって、彼の手を通じて第三者(6)に渡たり、その人の手によって公にされたものである。この一事をもってしても、この詩が女帝の歓心を買う目的で書かれたものでないことは明白である。詩人の宮廷貴族非難が本心から出たものであるなら、女帝賛美も真心からのものである。しかもこの場合考慮に入れておいて良いのは、頌詩の筆致が写実的なことである。頌詩の作者デルジャーヴィンは先行詩人に比べてレアリズムの要素が顕著なことで知られる詩人であり、十九世紀のロシア・レアリズム詩文学を準備した詩人の一人としての評価が高い。女帝賛美といい宮廷貴族批判といい、単なる主観の所産ではなく、緻密な観察に裏付けられたレアルな写生とみなすのが順当であろう。ただし女帝の人物像については、ある程度の誇張は含まれているかもしれない。何しろあまりにも完璧な君主像でありすぎ、その分だけ現実味が失われたきらいがある。崇拝者に特有のある程度の思い込みと詩人に固有のある種の感激性とによって、詩人のレアリストの眼は多少曇ったかも知れない。あるいは逆説的に言うなら、デルジャーヴィンほどの詩人をしてそれほどの思い込みと誇張におとしいれるほど女帝のカリスマ性は凄絶であった、とも考えられよう。

それでは女帝のそれほどまでの人間的魅力は一体どこからきたものであろうか。当然このような疑問が起こる。考

えてみるに、おそらくそれは、まず第一に女帝が貧しいドイツの公爵家の出であったこと、第二に十九歳にしてロシアの皇位継承者に嫁し、思わぬ事態の展開からロシアの帝位につくまでの十二年間常に不遇の生活を送ったこと、これらが女帝の天性の資質に一層の磨きをかけ、一筋縄ではいかぬ複雑で強靱でしかも人情の機微を弁えた魅力あふれる人格を作り上げたものと思われる。さらに重要なことにこの十二年間の歳月は、彼女が啓蒙専制君主になるための学習の期間であった。

エカテリーナの夫、後のピョートル三世(7)は病弱な上に子供のように幼稚な男で、しかも大酒飲みであり、その上彼女に世継ぎとなるべき子供が生れないのを良いことにして外に愛人までつくり、少しも妻を顧みなかったと言われる。一方、姑たるエリザヴェータ女帝(8)も、嫁に冷たく当たり、彼女の日常生活にことごとに干渉したとのことである。下世話で言われるところの嫁いびりが、皇宮の奥で行われた訳である。夫には裏切られ、姑にはいじめられるで、エカテリーナの毎日は苦渋に満ちたものであった。宮廷のきらびやかな夜会や舞踏会も、ドイツの公爵家の質素な家庭環境に育った彼女には重荷にこそなれ、慰めとはならなかったようである。

そんなエカテリーナにとって唯一の慰めは読書であったと言われる。初めの内はフランスの小説類を手あたりしだいに読んでいたが、やがてそれも読み尽くすと、今度は内容的により高度なものに手を出すようになり、ヴォルテールを知ることになる。そしてその作品をほとんど読破し、その偉大な啓蒙思想に傾倒する。エカテリーナと啓蒙主義との出会いである。ヴォルテールとの文通はこの時に始まり、その後長く続いた。読書の範囲はさらに広まり、神学者バールの『ドイツ史』(全十巻)、ベイリーの『哲学辞典』(全四巻)、それでもあきたらずディドロ、ダランベール、グリム、ルソーら百科全書家の著作を渉猟し、彼らの多くと文通した。エカテリーナには結婚後九年目にしてやっと待望の子供(9)が生れるが、生れた子供は国家の財産だとして姑エリザヴェータに取り上げられ、子育ての喜びさえ

も奪われてしまう。かくしてエカテリーナの読書と学習には一段と拍車がかかり、夫ピョートルが帝位につく頃までには、すでに押しも押されもしない教養人、啓蒙主義者、当代一流の文筆家になっていた。彼女が得意としたフランス語の文章は、一流のフランス作家のそれに比べても遜色がなかったと言われる。

エカテリーナはその生涯を通じておびただしい量の著述を行った。帝政時代に刊行された科学アカデミー版エカテリーナ全集は十二巻を数える。その内の主要な作品は次の通りである。政治的論文としては『新法典編纂委員会に与える訓示』[10](一七六七年)。これは通常『訓示』と呼ばれるもので、エカテリーナの師事した西ヨーロッパの啓蒙主義者たちの進歩的思想が大胆に取り入れられていることで有名な文書である。これについては後述の予定。文学活動の面では、諷刺雑誌の刊行(『フシャーカヤ・フシャチーナ(一切合財の意)』[11]一七六九年、『ロシア語愛好者の話相手』[12](一七八三〜八四年)。喜劇として『おお、時よ!』[13](一七七二年)、『ヴォルチャルキナ夫人の命名日』[14](同年)、『ヴェスニコーヴァ夫人と家庭』[15](同年)、『ペテン師』[16](一七八五年)、『誘惑された男』[17](同年)、『シベリヤのシャーマン僧』[18](同年)、教育童話として『クロール王子のお話』[19](一七八二年)、『フェヴェイ王子のお話』[20](同年)、この外に歴史書として『ロシア史に関する覚書』[21]がある。

わが国では今までのところ文学者エカテリーナの研究はほとんど手つかずの分野である。学際的見地からの研究が待たれる所以であるが、既刊の各種文献の断片的記述を総合すると、エカテリーナの著作の大半は啓蒙思想の宣伝・普及とそれによる旧習の打破、ロシア人の精神的覚醒という明確な目的意識をもって書かれている。例えば、喜劇『おお、時よ!』では、古い習慣にとらわれ、迷信と偏見に凝り固まった三人の女性が描かれており、彼女たちの時代遅れの古さが揶揄される。また『ヴォルチャルキナ夫人の命名日』でも、古い伝統を重ずるあまり、新制度の良さが理解できず、いたずらにそれに不満を抱く旧習墨守の人たちが槍玉に上げられるといった具合である。

エカテリーナの作品がいわゆる殿様芸であったのか否かは、この際問う必要がない。文学作品としての完成度もさることながら、重要なのは一国の王が教化思想の普及のため自らペンをとって劇をかき、首都の劇場で実際に上演させたことである。ちなみにエカテリーナの即位は一七六二年であるから、これらの喜劇は即位後十年目の作ということになる。まさに啓蒙専制君主としての面目躍如たるものがある。余談ながら、エカテリーナという人物の凄さというか分からない点というか、国内ではこうしたいわば文人肌の教化啓蒙活動を精力的に行いながら、その一方で対外的には諸外国と事を構え、後世の歴史家から集中攻撃されるところの侵略戦争を臆面もなく推進しているのである。その主なものは対トルコ戦（一七六八―七四年、一七八九―九二年）とポーランド分割（一七七二、九三、九五年）である。尤もこれらの戦争によってロシアは百年来の念願であったドニエストル川からクバン川にいたる黒海沿岸の土地とウクライナ及び白ロシアの広大な沃野を手に入れ、これらの地でとれる豊かな農産物を黒海を通って西ヨーロッパへ運び出す通商路を確保したのである。

さて啓蒙専制君主としてのエカテリーナの政治・行政面での最初の事業は教会領の没収（一七六四年）であった。教会の絶大な権威を帝権の下に置こうとする試みはすでにピョートル大帝[22]によって手がけられ、一七二一年総主教制度が廃され、教会は宗務院（シノド）の監督下にあった。エカテリーナはこれをさらに一歩押し進めたのである。そもそも教会の権威と宗教的不寛容の排除は、理性的な批判精神の涵養や思想・行動の自由を圧迫する絶対主義的権威の否定と共に、啓蒙思想の重要な一要素である。エカテリーナの試みは歴史的にはピョートル大帝の方針の延長線上にあるが、女帝自身にとっては自己の啓蒙主義者としての信念に基づく行動であったとも言えよう。ともかく女帝の試みは成功し、啓蒙専制君主としての行政手腕は立証された。しかしこれは次に女帝が行なおうとしたことに比べると、いわば大事の前の小事であった。

女帝の啓蒙専制君主としての特色が最も鮮明に現われた事業は、法典編纂委員会の召集とこの委員会のために自ら筆をとった長文の『訓示』である。西ヨーロッパの啓蒙思想を行政に大胆に反映させようとした点からいっても、社会的影響力の大きさからいっても、啓蒙専制君主エカテリーナの仕事中随一のものである。

一七六七年、即位後四年目、ロシア皇帝としての地位の安定を得たエカテリーナは、古くなった国家機構の再編と諸制度の改革に着手した。ピョートル大帝の大改革からすでに半世紀以上の月日が経過し、諸事旧弊が目立ち始めたロシアの現実に思い切った改革のメスを加えないことには、ロシア帝国の屋台骨が揺らぎかねない状態であった。何しろエカテリーナが即位した時、国の経済は乱れに乱れ、国庫は空っぽで、軍隊には八カ月も給料が支払われていない有り様であったと言われる。農業は荒廃し、農民の生活は窮乏し、ロシア各地で農民一揆が多発し、これを抑えるため政府の過酷な弾圧が繰り返されていた。こうした国内の乱れを立て直すためには、ピョートル大帝の死後足踏み状態を続けていた国の近代化を一層強力に押し進める必要があった。エカテリーナはこの一環としてロシアの古い法制度の改革を重視し、時代遅れとなった古い法典に代わる新法典の編纂を決意した。このため国民各層から五六五人の代表を選んで法典編纂委員会を結成し、この作業をモスクワにおいて行うよう下命した。新しい法典は、女帝の考えでは、世の中の不条理を除去するにたる優れた内容のものでなければならなかった。そこで女帝は委員会に対して長文の自筆の『訓示』を示し、新法典の主旨を全委員に周知徹底せしめたのである。

『訓示』は女帝の啓蒙思想家としての知識を総動員して書かれたものであり、信仰・言論・批評の自由が強調され、人格の尊厳が説かれていたことは言うまでもない。こうした考えと自分の専制君主としての立場を勘案して、女帝は次の三点を『訓示』の最重要の要素とした。㈠君主権の絶対性、㈡厳格な法治主義、㈢法の前での万人の平等。『訓示』には、ロシアの積年の悪弊とも言うべき農奴制についての明確な見解が含まれていなかったとはいうものの、当

時のロシアとしては画期的な内容のものであった。『訓示』の精神が生かされ、新法典が陽の目を見ていたなら、その後のロシア史は様相を一変していたであろう。

しかしエカテリーナにとってもロシアにとっても不幸なことに、法典編纂委員会の作業は遅々として進まず、具体的成果をあげ得ないまま対トルコ戦の勃発と共に中止となった。作業が難行したのは、委員相互の利害の対立に原因があった。委員会は三つのグループから成っていた。貴族の代表、市民（商工業者）の代表、国有地農民の代表がそれである。彼らの利害は鋭く対立した。例えば、市民は貴族と平等の特権を要求し、貴族は既得の特権に固執して譲らないといった有り様であった。かくして『訓示』の精神は画餅に帰し、女帝の大いなる事業は失敗に終わった。

法典編纂作業の失敗は後年歴史家の間でエカテリーナ評を著しく損う原因の一つとなった。曰く、女帝は法治主義とか法の前での万人の平等などという耳ざわりの良い言葉を口にするが、女帝にはもともと民衆を自由平等にしてやる気持ちなどなかったのだ。女帝は民衆の不満をなだめるために物分かりの良いポーズをとったのだ。その証拠にトルコと戦争が始まるや、これを口実にして早速委員会を解散させたではないか。女帝こそ啓蒙主義の皮をかぶった狼なのだ。エカテリーナに対するこの種の非難は枚挙にいとまがない。それはいずれもそれなりに真実の一端を物語るものであるかもしれない。こうした非難は啓蒙専制主義の道を自ら選んだエカテリーナ自身が謹しんで甘受すべきものなのであろう。そもそも法治主義と君主権の絶対性という概念は相矛盾するものである。君主の統治権の絶対性を否定し、法に準拠する政治を行うというのが法治主義の原理だからである。この二律背反する原理の結合を新法典の精神たらしめんとした点にすでに無理があったのである。女帝の事業は最初から原理的には失敗すべき運命にあったとも言えよう。この点でも女帝は非難されてしかるべきかもしれない。だが歴史は一足飛びに中世から現代にはならない。農奴制という中世的遺物が厳然として存続していた十八世紀のロシアにおいては、たとえ二律背反する原理で

あっても、その困難な結合を試みる価値は十分あったのではなかろうか。私見では然りである。エカテリーナはそれを行って失敗した。その結果、自己の啓蒙思想家としての高邁な精神までもが疑われる破目となってしまった。こと志と異なり、予期せぬ疑惑までつかみ取ってしまい、一体女帝の心中はどうだったであろうか。専制君主にして思想家であり、文学をよくし、軍事・外交にも秀でた人物の心情などは、そうたやすく忖度できるものでないが、女帝は少なからざる失意と内心の動揺を覚えたにちがいない。新法典編纂の失敗によって女帝の現実政治家としての当初計画は一頓挫をきたしたからである。

しかし翻って考えてみるに、なるほど女帝の企図は失敗した。だがそれですべては終ったのであろうか。否である。むしろ始まったと言うべきである。なるほど女帝の事業は法典という形では結実しなかった。だが一国の最高権力者によって投ぜられた一石は、いわば文化革命とでも言うべき衝撃をロシアの社会に与え、波紋は広く深く広がったのである。

法典編纂委員会にはニコライ・ノヴィコフ(23)(一七四四―一八一八年)という青年が書記として働いていた。彼はペテルブルグ近衛連隊の気鋭の青年将校であったが、委員会の設置と同時に女帝によってモスクワへ派遣され、書記としての任務についたものである。彼は委員会の作業をつぶさに見聞していくうちに、各委員の報告や演説や議論を通してロシア社会の各方面の事情に精通するようになった。彼を最も驚かせたのは、ロシアがいかに悲しい国であるかということだった。異句同音に委員たちの口をついて出るロシアの悲惨な現状――裁判の不正、政府高官の専横、貴族の横暴、農民の無権利、農奴のみじめな生活……、それらのどれ一つをとってみても、多感な青年ノヴィコフの胸を締めつけないものはなかった。

当時のロシアは農奴制をしく封建的農業国であり、産業革命を経験した西ヨーロッパの先進諸国と異なりマニファ

クチュアの発達は不十分であった。それ故国民の大半は農民であり、しかもその半分以上は貴族に私有される農奴であった。そして残り半分の農民は宮廷農奴といわれ、国有地で働かされていた。宮廷農奴の場合は、先の法典編纂委員会にも貴族や市民と並んで代表の出席が認められ、まだしも人間らしい扱いを受けたが、貴族の個人所有になるいわゆる私有地農奴は、悲惨そのものであった。彼らは全くの無権利の状態に置かれ、あたかも家畜の如くに売り買いされた。私有地農奴の売買は法的に認められた貴族の特権であった。こうした文字通り非人間的で醜悪な農奴制をいかにすれば廃止できるかが、その後百年にわたるロシアの啓蒙運動の最重要課題となり、一八六一年ついに農奴制廃止の大号令が下るのであるが、それはまだ先のことである。エカテリーナ女帝の時代――もとよりそれ以前も以後も――ロシアの農奴は全くの無権利の状態で過酷な労働を強いられていた。エカテリーナの評価が後世の歴史家の間で決定的に悪化するのは、女帝がこのような厭うべき農奴制の廃止に向けて何らの有効な手を打たなかったのみならず、その後貴族の要求に屈して逆に農奴制を強化(24)するという暴挙を敢えて行ったからである。この点で女帝はいくら非難されてもしかたがない。何人もこの点で女帝を弁護できない。エカテリーナ女帝の時代はロシアにおける農奴制の完成期だとする見方が一般的である。そもそもロシアの農奴制がいつごろからのものであるかは議論の分かれるところであるが、大ざっぱに言って、十五世紀末ロシア国家の中央集権化が進み出してから顕著になったもののようである。しかしその頃はまだ法律的締め付けはさほど厳しくなく、一年に一回「ユーリーの日」(25)(十一月二十六日)の前後各一週間に限り農奴は貴族の領地を出奔して、いずくへなりと自分の好む土地へ移住する権利が認められていたと言われる。しかしその後しだいに法律による締め付けが強まり、エカテリーナが帝位につく十八世紀中葉までには、農奴の移住の権利は完全に奪われ、農奴は百パーセント貴族の所有物と化していた。そして所有物である以上、

勝手に逃亡することは法を犯すことになり、逃亡農奴の追跡は公権力の手で執拗をきわめた。法的締め付けのゆるやかな頃は、追跡の手を逃がれて一定期間――時代によって長さが異なる――を逃げとおした場合、晴れて自由の身になれたようだが、やがてそうしたこともなくなり、エカテリーナ女帝の時には逃亡農奴は生きている限り元の所有主のものであった。発見されて捕えられると、連れ戻され、見せしめのため残忍な体罰が加えられ、多くは徒刑囚としてシベリヤへ送られ、鉱石の堀り出し等の過酷な強制労働につかされた。生きて故郷の村へ帰れた者は少なかったと言われる。こうした悲惨な農奴制下のロシアでは、各地で農民一揆が起こった。その大規模なものは農民戦争と言われるもので、十七世紀にはステパン・ラージンの反乱（一七六七―七一年）、十八世紀にはプガチョフの反乱（一七七三―七五年）が起こっている。

ニコライ・ノヴィコフはエカテリーナ女帝によって命じられた法典編纂委員会の仕事を通じてロシアのこうした悲しい現実をつぶさに知った。その結果彼の世界観とその後の人生は大きく変わった。彼の心には世の中の不条理に対する怒りと抗議の感情が芽生え、それは急速に大きくなった。彼は委員会の解散と同時に近衛将校の職を辞し、ペンの力によって世の不条理と戦う道を選んだのである。エカテリーナ女帝の事業はその本来の目的を達成することはできなかったが、ここに前途有為な青年を目覚めさせ、ペンの戦士として世に送り出したのである。

『雄蜂』[26]（一七六九―七〇年）、『ほら吹き』[27]（一七七〇年）、『画家』[28]（一七七二―七三年）、『財布』[29]（一七七四年）、これらはいずれもその後ノヴィコフによって刊行された諷刺雑誌である。ノヴィコフはこれらの雑誌でさまざまな社会的不条理を暴露し、それらを揶揄し糾弾している。彼は鋭い社会諷刺を世の不条理と戦う最も有効な手段と考えた。彼はこの手段によって世の中のあらゆる悪弊――土地貴族の非人間性・破廉恥・横暴・無為、人々の無知蒙昧、上流貴族の頽廃、裁判官の収賄、僧侶の貪欲、舶来崇拝、フランスかぶれ等々を槍玉にあげた。また彼は自分

の雑誌でエカテリーナ女帝の啓蒙思想家気どりや文学趣味を揶揄し、女帝に論争を挑んだりした。彼の考えでは、文学は時の政治権力から自立していることが必要であった。これは痛烈な社会諷刺を旨とする彼の文学観からすれば当然のことであった。女帝の側からは素早い反応があった。女帝もまた自分の雑誌で反論した。一国の王と一雑誌編集発行人との一対一の論戦である。これはもうよほど世間の関心を呼んだにちがいない。世論を喚起し、啓蒙思想の普及を図り、一世を教化するという点では、またとない興行となったであろう。エカテリーナ女帝はプガチョフの反乱の鎮圧以降はしだいに右傾化の速度を早めていくが、六〇年代末～七〇年代初頭の時点では、デルジャーヴィンが頌詩で賛美したように、論敵に対して寛容であり、言論を弾圧することは比較的少なかったようである。この時両者がそれぞれ論陣を張った雑誌は、ノヴィコフが『雄蜂』、エカテリーナ女帝が『フシャーカヤ・フシャチーナ』であった。論争の勝敗はともかく、一つにはこうした論争が世論を大いに刺激し、ロシアでは従来になかったほど文化的活動が活発になる。エカテリーナの治世はロシア文化史上初めての画期的時代だと言われるが、それは女帝自身の教化活動に対するこうした情熱的姿勢やその影響下に登場したノヴィコフの活躍に負うところが決して小さくなかったであろう。ちなみにノヴィコフの雑誌は非常に好評で、なかでも『画工』は十八世紀中に五回再版された。雑誌の影響力の大きさを物語る数字である。

ノヴィコフの教化活動は確かに目覚ましいものであった。文学の面から言うなら、彼の創作は社会諷刺と現実批判の優越を特色とするロシア古典主義文学の枠組みの中でなされ、その特色を最もよく作品に反映させた文学者であり、この文学潮流を最もよく代表する作家の一人であった。しかし彼の教化思想にはただ一つ重要な要素の欠落があると言われる。その要素とは、農奴制廃止の要求である。通常、十八・十九世紀のロシアにおける啓蒙思想は三つの主要な特徴を有する。すなわち①農奴制への敵対……②国民の啓蒙（教化・教育）、自由、自治、及び一定程度のロシア

のヨーロッパ化の擁護、㈢農奴制廃止の要求。ノヴィコフの視野にはこの内の第三の要求が欠落していた。彼は個々の非人間的な農奴所有貴族の悪を非難するが、悪の根源を個人としての貴族の責任に帰して制度そのものに責任があるという見方はとらない。換言するなら、横暴な貴族たちの悪は糾弾するが、一歩を進めて農奴制の本質的な批判にまで達せず、従って農奴制そのものの廃止、ロシアの政治体制の変革は要求しない。この意味においてノヴィコフの教化思想は今一つ迫力に欠けるうらみがあった。それと言うのも、彼は啓蒙思想を彼なりに深く信奉するあまり、知識を広め、無知蒙昧をなくし、人々を道徳的に教化することによって世の中の不条理を撲滅できると考えていたからである。この点で彼の啓蒙主義はエカテリーナのそれと一脈相通じるものがあった。女帝がロシアの遅れた法典を刷新するに際して、一方では法の前での万人の平等といった斬新な思想を取り入れながら、農奴制の存廃については口をつぐんでいたように、ノヴィコフの視野の中にも体制変革に通ずる農奴制廃止の観点はなかった。彼の教化思想は確かにこの点で不十分であった。しかしそれは彼一人の責任ではなく、ロシアの啓蒙主義全体がまだ十分に熟していなかったからであろう。ノヴィコフの教化活動の意義はロシアの積年の悪弊たる農奴制の害悪に対してロシアで初めて声高な抗議の叫びをあげた点にある。

ロシア古典主義の文学者たちは概してノヴィコフと同様で、農奴制の現象面での諸悪に対しては痛棒をくらわせているが、農奴制の本質的批判には達していない。例えば劇作家フォンヴィジン(30)（一七四五―九二年）は喜劇『親がかり』(31)（一七八二年）において狡猾で残酷で貪欲な女地主プロスタコーヴァ（単純な人、馬鹿者の意）とその息子ミトロファン（馬鹿息子の意）の愚劣な所業を心憎いまでに痛快に揶揄し、農奴制によってもたらされる害悪に警鐘を鳴らしている。しかし農奴制そのものの廃止を叫ぶまでには至っていない。また古典主義に続いて起こるセンチメンタリズムの潮流に属する文学者たちも概して同じである。ロシアのセンチメンタリズムは西ヨーロッパのそれと異

なりブルジョアエートスが希薄であり、階級意識に根差した批判精神や反骨的な反封建主義の要素は少ない。例えばこの文学潮流を代表する作家カラムジン(32)（一七六六―一八二六年）は中編小説『あわれなリーザ』(33)（一七九二年）において一人の清純な百姓娘を主人公にしている。ロシアの小説で農民の娘が主人公になるのはまさに前代未聞のことだとされるが、作者はこの娘が貴族の青年の肉欲の犠牲になったあげく、彼に捨てられ、最後には世をはかなんで自殺するにいたる事情を哀感をこめて描いている。そしてこの百姓娘に心からの同情を寄せている。しかし彼女の不幸の真の原因が何であるかについては触れていない。物語は娘の死を知った貴族の青年が自分の行いを深く後悔し、彼女を心から哀れむところで終わっている。かくして百姓娘の死に直接の責任を負うべき貴族の青年も、前非を悔い娘の死を哀れむという優しい心根の故に免罪されている。作者カラムジンの視野には貴族対農民という階級的対立の構図は全く入っていない。尤もこの小説は従来のロシア小説に見られなかったセンチメンタルな要素に加うるに牧歌的な自然描写や流麗な文体によって当時のロシア文壇に新風を吹き込み、その後のロシア小説の発展に大きな影響を及ぼすものであった。

十八世紀のロシアの文壇、思想界において最初に農奴制の廃止を声高に叫んだのはラジーシチェフ(34)（一七四九―一八〇二年）であった。彼はノヴィコフと同様にエカテリーナ女帝と因縁浅からぬ文学者であった。両者の出会いは彼が十五歳の少年の頃だとされる。彼は教養豊かな退役軍人の家に生れ、教育熱心な父親の薫陶を受けて、知的で感受性の繊細な少年に育っていた。まさにエカテリーナ好みの少年だったわけである。ある時女帝の目にとまったのが機縁となって女帝の命令でペテルブルグ少年待従学校へ入れられた。そして三年後再び女帝のお声がかりでドイツのライプチヒ大学へ数人の秀才と共に送られた。女帝が何を期待してこのようなことをしたかは言うまでもない。十八歳のラジーシチェフはこうして五年間ドイツの大学で学び、西ヨーロッパの進んだ知識を身につける。とりわけ彼の

心を引き付けたのはヴォルテール、ディドロ、ルソーらであった。ここまでは女帝の期待通りであった。帰国の暁には女帝の教化活動の良き助手として然るべきポストが与えられるはずであった。ところが女帝にとっては皮肉なことに、彼は西ヨーロッパの啓蒙主義者たちの思想を女帝が期待するようには受けとめなかった。彼はそれをはるかにラジカルな思想として受け入れたのである。彼は五年間の学業を終えて帰国した時、ロシアの農奴制は言うに及ばず、専制政治そのものをも否定するような人間になっていた。ロシアの専制政治は人間が人間らしい生活をすることにとって最も妨げとなると言うのが彼の結論であった。エカテリーナ女帝にとってはまことに皮肉な結果になったと言わざるを得ない。自ら命じてドイツへ留学させた少年が、ドイツでの勉強の結果、自分が拠って立つ専制主義そのものを根底から否定する結論に到達したのである。これをしも自分の啓蒙専制主義の果実として受容しなければならないのか。女帝の心理は複雑であったにちがいない。あるいは賢明な女帝には理解できたかもしれない。これこそが啓蒙専制主義という論理矛盾を内包した思想構造の申し子であると。

一七九〇年このいわば鬼子は『ペテルブルグからモスクワへの旅』(35)という衝撃的なルポルタージュをついに発表した。これは彼がペテルブルグからモスクワへの旅の途中実際に見聞したことをもとにして書いた紀行文であり、ここには農奴制ロシアの醜悪で目をおおいたくなるような現実が赤裸々に描かれていた。まさに全文農奴制呪詛の書であった。しかもさらに衝撃的なことには、そこにはロシア社会の根本的変革、ロシアにおけるフランス大革命の必要性が示唆されていた。

紀行文はペテルブルグからモスクワへ至る街道沿いにある二十四の駅逓の名前がそれぞれの章の題名となっている。例えば『メドノエ』という章を見てみよう。そこでは農奴の競売という衝撃的光景が描かれている。作者の視線は壇上の六人の農奴の哀れな姿に釘付けにされている。その中の一人、杖にすがって立つ老農奴は今や老いさらばえて見

る影もないが、かってはご主人様と共に戦場を駆け巡ぐり、彼が傷付き倒れた時には彼を背中にかついで運びその生命を救ったこともある人物である。老農奴の傍らにはその年老いた妻と十八歳にる娘とその夫とさらにもう一人の農奴が立たされている。娘の腕には乳飲み子が抱かれている。この赤ん坊は夫との間に出来た子でなく、ご主人様の一時の肉欲の犠牲になって生れた子である。いわば忌まわしい暴力の悲しい結実なのである。作者は競売にかけられている農奴たちのこの悲しい姿を見て、言い知れぬ怒りを感じ、次のように心で叫ぶのである。「恥ずべきロシアの習慣――競売、奴隷身分、強姦をなくし、不幸な人々を自由にする力が私にあったら！」と。

紀行文はロシアの知識層に強い印象を与えた。時あたかもフランス大革命の直後のこととて、印象はよけい増幅された。ロシアにも革命の報が伝わり、知識層の良心的部分ではようやくにして農奴制の廃止と社会変革の必要性が真剣に考えられ始めた矢先のことだったからである。ラジーシチェフはロシア文学における最初の革命精神の鼓吹者であると言われる通り、その後知識層の中から大勢のラジーシチェフたちが生れていった。そうしてそうした人たちの活動はやがて一八二五年のデカブリストの反乱、ロシアで最初の革命的蜂起へと発展して行くのであった。

思えばエカテリーナ女帝はロシアの歴史的社会発展の過程で実に皮肉な役回りを演じたものである。十八世紀中葉から世紀末にかけてロシアの啓蒙主義が一段と高まりを見せ始めた時期に、自分自身も啓蒙専制君主としてこの運動の一翼を担い、前述した種々の事業を興してこの運動の高揚に少なからざるインパクトを与えた。そして思わぬことからノヴィコフ、ラジーシチェフというロシア啓蒙運動の中心的人物の登場に手を貸したりもした。ところが事態は予期せぬ方向へ急速に発展し、啓蒙思想がロシアの社会に根を下ろせば下ろすほど、女帝が拠って立つ帝政の土台は堀り崩されていくのであった。このような皮肉に女帝がいつごろ気付いたかは詳らかでないが、プガチョフの反乱が女帝にとっては最初のショックでこれ以後しだいに右傾化し、フランス大革命が勃発しフランスの王制がもろくも崩

壊するのを見るに及んで、女帝は反動の人となってしまった。そしてロシアの専制政治を批判したり、農奴制の廃止を求める発言には容赦のない弾圧の姿勢で臨むようになった。ラジーシチェフが女帝の魔手を逃がれられなかったことは言うまでもない。彼はシベリヤへ流刑に処せられ、紀行文は国禁の書とされた。またノヴィコフまでもが獄に繋がれ、女帝の生存中はついに許されることがなかった。その外女帝の魔手はあらゆるところに及び、人々はもうあの『訓示』の筆者がエカテリーナ女帝であると言っても誰も信用しなくなってしまった。

（一九八〇・九・一）

注

（1）Екатерина Алексеевна (1729–1796)

（2）《Большая советская энциклопедия》, Москва, Издательство Советская энциклопедия, 1972, третье издание, т. 9 стр. 74.

（3）Ода《Фелица》　この題名は女帝の書いた教育童話『クロール王子のお話』（一七八二年）の中に登場するキルギスのカイサキ汗国の王女フェリーツァに因んでつけられたものである。

（4）Державин, Гаврила Романович (1743–1816)

（5）「世界名詩集大成」、平凡社刊、昭和三十七年、第十二巻、「ロシア」編、五二—五六ページ。

（6）当時、科学アカデミー長官の職にあった公爵ダシコフの夫人ダシコヴァのこと。

（7）Пётр III Фёдорович (1728–1762) ピョートル三世の幼稚さは有名で、伝記作家によれば、ある日エカテリーナが夫であるピョートルの部屋に入ったところ、彼はおもちゃの兵隊の閲兵式をやっているところであった。見ると天井から縄がぶらさがり、その先にねずみが一匹ゆわえつけられていた。この異様な光景に驚いてエカテリーナが尋ねると、ピョートルが答えていうには、パン粉をねって作った彼の大切なおもちゃの兵隊をねずみがかじったので、ひっとらえて軍法会議にかけ絞首刑に処したのだとのことであった。一事が万事この調子で、ピョートルは帝位についてからもこの幼稚さが抜けず、かねてよりフリードリッヒ大王の心酔者であった彼はロシア兵の軍服をプロシャ風にあ

らためるなど、ロシア軍の誇りを傷付けるなど愚行が多かった。このため近衛連隊の青年将校のクーデターにあい、帝位を追われ、不幸な死をつかみとった。エカテリーナはそのあとを襲って帝位についたものである。

(8) Елизавета Петровна (1709-1741)

「栄光なきにしもあらず」と言われる女帝で、一七五九年クネルスドルクでフリードリッヒ大王軍を破り、ベルリンを占領したことがある気丈な女帝。彼女には世継となるべ子供がいなかったため、ドイツのホルシュタイン公爵に嫁していた姉の子ピョートル（エカテリーナの後の夫）を養子にして、ロシアの皇位継承者とした。そしてピョートルが十七歳をむかえた時、フリードリッヒ大王の王女を彼の嫁にと望んだが、ロシアの「野蛮人」のところへ王女をやる訳にはいかないとばかりに大王から肘鉄をくわされ、代わりに大王の家臣の娘を嫁にもらうことになった。これがエカテリーナであった。こうした事情があってかあらずか、エリザヴェータ女帝の嫁いびりは異常で、四六時中エカテリーナを監視し、いわゆる箸の上げ下ろしにまで嘴をさしはさんだと言われる。

(9) この子が後のパーヴェル皇帝。恐怖政治を行なったことで有名である。

(10) 《Наказ, данный комиссии о сочинении проекта нового Уложения》, 1767.

(11) Журнал 《Всякая всячина》, 1769.

(12) Журнал 《Собеседник любителей российского слова》, 1783-84.

(13) Комедия 《О время!》, 1772.

(14) Комедия 《Именины г-жи Ворчалкиной》, 1772.

(15) Комедия 《Г-жа Вестникова семьей》, 1772.

(16) Комедия 《Обманщик》, 1785.

(17) Комедия 《Обольщенный》, 1785.

(18) Комедия 《Шаман сибирский》, 1786.

(19) 《Сказка о царевиче Хлоре》, 1782.

(20) 《Сказка о царевиче февее》, 1782.

(21) 《Записки касательно российской истории》

(22) Пётр 1 Алексеевич, Великий (1672-1725)

ロシア近代化の祖。ロシアの首都を内陸部のモスクワからバルト海に面したペテルブルグへ移し、西ヨーロッパの進んだ文物を積極的に導入し、国内の諸制度の改革を大胆に行うなどしてロシアの近代化に力を注いだ。またスウェーデンと二十年戦争をするなど近隣諸国と争い、ロシアの領土を拡大した。ピョートル大帝以前のロシアはモスクワ大公国と呼ばれるいわばヨー

ロッパの片田舎に位置する一公国（クニャーシ）（公によって治められる国）にすぎなかった。ロシアで最初に皇帝の称号を用いたのはピョートル大帝である。ロシアの詩人ヘラスコフは「ピョートルはロシアに肉体（註・ロシア帝国の領土）を与え、エカテリーナは魂（註・精神的文化）を与えた」と語っている。

(23) Новиков, Николай Иванович (1744-1818)

(24) プガチョフの反乱に恐怖した女帝は反乱鎮圧後の一七七五年地方行政を掌握するため新しい管理制度 Учреждение для управления губерний （地方行政法）を制定し、地方における官僚機構を強化すると共に地方の貴族に行政の権限を大幅に与えた。そしてその十年後の一七八五年には貴族および市民（商工業者）に Жалованная грамота （詔勅）を授与して、特権身分を保証し、所有地における農奴に対する全権力を与えた。かくして貴族は地方における行政権と身分的特権の確認と農奴に対する絶対権を手に入れ、ここにロシア貴族の黄金期といわれる時代が現出したのである。

(25) Юрьев день (осенный) ギリシャ正教会の祭日の一つ。

(26) Сатич. журнал《Трутень》, (1770)

(27) 《Пустомеля》, (1770)

(28) 《Живописец》, (1772-73)

(29) 《Кошелек》, (1774)

(30) Фонвизн, Денис Иванович (1745-92)

(31) 《Недоросль》, (1782)

(32) Карамзин, Николай Михайлович (1766-1826)

(33) 《Бедная Лиза》, (1792)

(34) Радищев, Александр Николаевич (1749-1802)

(35) 《Путешествие из Петрбурга в Мотквy》(1790)